北東中だより No.9

甲府市立北東中学校
令和3年11月29日
文責　近藤　健一

青瞬～あくなき挑戦～　二葉祭文化部門

11月12日(金)二葉祭文化部門が開催されました。　今年度は夏季休業後半の感染症拡大状況から体育部門と切り離しての実施となりました。9月の体育部門実施後、新人戦、中間テスト、校長会テスト、修学旅行といったいくつかのヤマを越え、学級役員の改選、新生徒会役員選挙への準備と並行しながら、この二葉祭後半に向けて取り組みを進めてきました。

まずは『学校日誌』の記述です。教職員の思いが綴られており、取組の様子が伝わるかと思います。

10月15日（金）
1、2年生の中間テストが行われた。その後の6校時はどの学年も二葉祭文化部門の取組を行っていた。どの学年もよいものをつくってほしい。

10月20日（水）
やることが多く、忙しい日々ではあるが、本日第4回の代議員会がありました。二葉祭文化の部に向けて全校で頑張りたい。

11月5日（金）
肌寒くなる中、生徒達は学園祭準備に部活にと頑張っていました。来週も一日一日を大切に学園祭に向けてラストスパートをかけたいと思います。

11月8日（月）
生徒会役員員選挙の活動が本格的に動き始めました。今週は学園祭文化部門もあります。様々な活動や行事を通して生徒には**学び取ってほしい**です。

11月10日（水）
二葉祭に向けて準備が進んでいる。生徒達にみんなで**創る姿勢**をつくれるように働きかけたい。

11月11日（木）
二葉祭文化部門前日。生徒の動きから意識が高まってきた様子がうかがえました。**すべての生徒が笑顔になれ、思い出に残る二葉祭になりますように。**

11月12日（金）
二葉祭文化部門が開催された。どの学年も限られた時間の中で素晴らしい作品をつくった。大切なのは時間ではなく、やはり気持ちだと思った。

きちんと取り組み期間が設けられないこと、分散を決めた当初はオンラインでの開催などを考えていたことなど、いくつかの条件をクリアしながら、思い切って従来の形式にとらわれないで全く新しい行事として実施しようと、生徒達はたくさんの知恵を絞り、考え抜いて企画を進めました。生徒会本部役員を中心に、各学年生徒会役員や発表担当者、全校制作などの部門担当者など限られた時間の中でよりよい発表となり活動となるよう、工夫を凝らして頑張っていました。

そして文化部門当日は、まさに全員で「創る」学園祭になりました。ボディパーカッションを中心にした1年生の発表、手話をテーマに動画とライブを融合した2年生の発表、「平和」を題材として学級ごとに工夫を凝らした3年生の発表、そしてミッションと銘打って全校で一体となって楽しんだ企画……どれもが実に見事に展開され、心から素晴らしいという思いが湧き起こりました。また3年生には第一線からの引退の花道となった吹奏楽部、美術部の発表、アイデアが詰まったオープニングやクロージングも感動を覚える内容でした。　「青瞬」を感じる一時となりました。

全校で校歌を歌ったのは今年度初でした。また応援団に引っ張られ、伝統のフレフレ北東！を全校で演じました。応援団の3年生は伝統の一端を残してくれました。全校生徒が一つになれた瞬間でした。

令和3年度の二葉祭は、新しい考え方や企画、活動が試みられた学園祭となりました。一方で従来の、熱気に包まれた体育館でのクロージングにも価値があることでしょう。開校当初からずっと続く二葉祭、来年度はどんな形で実現するのか、とても楽しみです。

夢先生『ダンビラムーチョ』さんをお迎えして

11月26日(金)、「てて! TV 」等で活躍中のお笑いコンビ『ダンビラムーチョ』さんをお迎えし、全校でお話を聞く機会を得ることができました。コンビのお一人、大原優一さんは本校の卒業生で、在校当時のエピソードなどを交えながら、お笑いのネタをいくつも披露してくださり、またジェスチャーゲームなどで全校生徒(教師も)を巻き込みながら、会場を笑いの渦に包みこんでいました。

お話の終盤で、生徒が予め書いていた「ドリームシート」をめくりながら何名かの夢を取り上げ、「すばらしいね!いいね!」「身近な夢がいいんだよ」「いくつも夢があるといいかも」などとコメントを言ってくれました。 “夢をもちましょう!”ではなく、夢にもいろいろな形があるね!と平易な言葉で語ってくださったようにも感じました。

ドリームシートの中に「誰かを支える人になりたい」「幸せな人生を送れるようにしたい」ということを書いてくれた生徒もいました。生徒のみなさんには「先の先を見よう、考えよう」と話すことがあります。夢や目標を実現させるための方法やプロセスも重要ですが、そもそもなぜそう思うのかという本質を自分に問うてみることも大切だと、コメントを聞いていてあらためて思いました。

夢、将来について考える機会をくださったダンビラムーチョのお二人、ありがとうございました。

小春日和（こはるびより）

“小春日和は晩秋から初冬にかけての
暖かく穏やかな晴天である”

『飯田蛇笏・龍太』展が生徒玄関前で11月17日まで開かれました。

二人のジオラマを興味深く見た生徒もいたかと思います。展示には数冊の関連本が置かれましたが、手に取ってページを手繰ると、たくさんの優れた句が目にとまりました。

どれもしみじみと心に入ってくるようなものばかりで、生徒のみなさんも味わってくれたかと思います。

ここで11月の句をいくつか紹介します。

（『蛇笏・龍太の山河』 福田甲子雄編著
山日ライブラリー より引用）

冬に入る空のけんらん日々ふかく
蛇笏

暦の上では立冬の日から冬となり、朝や夜は手足に冷えが感じられる. しかし空はきらびやかに澄んで美しい。青く深い海の底のようだ。

白雲のうしろはるけき小春かな
龍太

旧暦十月は十二月七日まで。この季節は風が少なく春のように暖かい晴天の日が続く。[うしろ]の表現に過ぎた歳月の遥かさが加わる。

冬の日のこの土太古の匂ひかな
蛇笏

いま踏みしめている地に燦々と冬の太陽が注ぎ、そこから大昔の匂いを感じた。冬の穏やかな日でなければこの太古の匂いはない。

捨てられし仔猫（こねこ）に小春日和かな
龍太

小春日和に捨てられた仔猫が鳴いている。つい手を出しあやしたくなるような愛情が感じられるのは小春日和の穏やかさからだ。